

寛容性の研究(1)

—“身体の構え”と“心の構え”との関連性についての探索的研究—

稲越孝雄

A Study of Tolerance (1)

— Preliminary Study for the Relation between
“Physical Set” and “Psychological Set” —

Takao Inakoshi

1. “自己”の内的一貫性の追求と“非自己”への寛容性をめぐって

(1) “自己”の一貫性を求める身体システムについて

生体は、様々なレベルにおいて、いわゆる“自己”を保存しようとするシステムを保有している。自己の身体システムの中に、自己以外の、他の生物体や、生物体の組織、あるいは生物以外の物体などのいわゆる“非自己”が侵入する事は、生物体が自己を保存しようとする目的にとって不都合である事が多い。その為に生物体は何らかの形でこれを排除し、あるいはその働きを封じこめよとするシステムを持つのである。このようなシステムを生体防御と呼ぶ。生体防御に関する要素の中で、最も進化したものが、免疫である。

これに対して、直接的に体内に入ってくる物質ではなく、自己をとり囲んでいる環境に対して自己を防御するシステムをももっている。明るさ、音、振動などに代表される物理的環境、においや空気などの化学的環境、さらには私達をとりまわっている人間の環境に対しても、生体内の状態を一定に保とうとする機能を持ち、外的環境に適応しようとする反応を

生ずる。外からの働きかけが一定以上の強い刺激に至ると、ストレスと呼ばれる状態を生じる。

しかし、このような免疫反応やストレスに対する反応は、個人によってその表れ方は様々に異なる。

① 免疫システムの個体差

人間の場合、第6染色体上に、自分以外の人間や他の生物からの臓器や組織を拒否する際に、拒否する対象となる非自己抗原（主要組織適合抗原）を決定する遺伝子群の存在が明らかにされている。更にこの部位には、補体の産生量を定める遺伝子、特定の非自己抗原に対する免疫反応の強さを定める免疫反応遺伝子、免疫が関与する病気に対するかかり易さを決定する遺伝子などが存在し、これらの遺伝子群は、主要組織適合複合体（MHC：Major Histocompatibility Complex）と呼ばれる。

このように、非自己に関する免疫上の感受性や、その反応性の個人差には、まず遺伝的に決定される部分が存在する。

これに加えて、免疫系のシステムは、同一の抗原刺激（非経口的に生体内にもちこまれた場合に抗体を産生または、その抗原と特異

的に反応するリンパ球の生成をもたらす物質。分子量が大きく、抗体産生者に対して異質な物質。)が一度体内に侵入し、二度目に侵入した場合に、特異的な適応性を示すことが知られている。いわば、体験を通しての適応性である。この適応性は、二度目の反応が、最初に抗原に遭遇した場合よりも、反応が急速で、反応の幅が増幅される“メモリー”状態と、反応の幅が減少又は無反応状態を示す“トレランス”状態とがある。このトレランス(寛容性)は、新生児期又は胎生期の生体は比較的容易に導入することが可能であるが、成長期の動物に導入することはきわめて困難であるといわれている。このように個人の免疫システムは、遺伝的に決定される部分に加えて、本人の体験がもう一つの条件をとって反応の個人差を作り出す。

② 免疫システムとアレルギー

このように、生体が自己を守るシステムである免疫反応が、過剰な反応を示して、自己の生体に傷害を起こすことがある。これをアレルギー反応と呼んでいる。

アレルギー反応については Coombs と Gell (1963) の分類がある。

I型：即時型、アナフィラシー型

II型：細胞障害型、細胞融解型

III型：免疫複合型、アルサス型

IV型：細胞免疫型、遅延型

この中で、I型はアレルギー(反応の原因となる抗原)と接触すると直ちに症状をおこす一群の病気であり、気管支ぜんそく、アレルギー性鼻炎、花粉症、急性じんま疹、アトピー性皮膚炎などがそれである。これらのアレルギーでは、原因物質が呼吸器から侵入するものが多いので、吸入性アレルギーと呼ばれる。吸入性アレルギーと同様に、その発症によって生活に大きな支障をもたらすのが、食物性アレルギーである。食物性アレルギーはI型アレルギーである事はまれで、むしろIII型アレルギーやII型、IV型アレルギーであ

表1 加齢にともなうアレルギーのタイプの変化(館野幸司 1981 より。数字はアレルギー外来での発生頻度)

年齢 アレルギー	年齢															
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
食物性	6	6	3	2	2	2	1	1								
食物性 +吸入性	1	1	6	5	3	6	3	2	2	2						
吸入性		1	1	9	3	2	9	4	7	1	3	1				1

る事が多いといわれている。そのために、食物性アレルギーでは、同一の原因食物を食べても、時と場合によって症状の有無、程度、種類などが変化して様ではない。

発達のには食物性アレルギーが乳幼児に多く、加齢とともに漸減するのに対して、吸入性アレルギーは、4、5歳ごろから現れはじめ、加齢に伴って増加する。(表1)食物性アレルギーは、加齢に伴って抵抗力を獲得して、原因になる食物に対して耐性を示すようになる。吸入性アレルギーも、このような自然治癒傾向が多少は見られるが、食物性アレルギーほどには、この傾向は見られない。

③ アレルギー反応の心理学的側面とストレス

このようなアレルギー反応の原因となる免疫反応の抗体産生から抗原抗体反応にもとづく身体症状出現の段階は、生理学的には、単に末梢的なものでなく、脳(中枢)の機能が関与している事が、近年、“精神神経免疫学”(Psychoneuro immunology)の領域で指摘されるようになった。

吾郷(1989)は、アレルギー疾患の中で、吸入性の代表ともいえる気管支ぜんそくについて、その発症前の生活について調査し、その生活環境や人間関係、役割などに、何らかの変化が見られる事の多い事を見出している。(表2)この事は、心理社会的ストレスが大脳新皮質に影響を与えて、これが間接的に自律神経系や内分泌系に影響を与えて、免

表2 気管支ぜんそくの発症年齢と先行体験 (吾郷 1989)

先行体験	発症年齢 (例数)					
	0~9 (n=63)	10~19 (n=29)	20~29 (n=57)	30~39 (n=37)	40~49 (n=13)	50~ (n=10)
両親との分離体験	6	3				
弟妹の誕生, 同胞葛藤	27					
親子関係の問題	11	3	3	2		
入園・入学	16	15	1			
職場の役割・対人葛藤		4	20	8	8	
結婚, 再婚			23	22	2	2
離婚, 失恋など			4			
配偶者の死			2	4	1	3
定年退職						3
不明・その他	3	4	4	1	2	2

疫系のシステムに過剰な反応を生じし易い状態をひきおこしている事が想定される。

④ 内的環境の平衡性をおびやかすものとしてのストレス刺激

生物体が体内の平衡を維持しようとするもう一つの生体反応が、ストレス源に対する防衛反応である。生体に害のある外部刺激が、外部環境から入ると、それに抵抗するように内部環境を常ち一定の正常水準に維持しようとする生体の機能をホメオスタシス (恒常機能) と呼ぶ。ストレス源に対するストレス反応は、生体の恒常機能が乱されることの現れであり、内部環境の変化が症状として現れるとき、それが明白となる。

ストレス源となりうるストレス刺激については、次の3つのレベルのものがある。

- I : 物理的ストレス (外部環境からのストレスのうち、音・光・温度・空気中の化学物質などの刺激が、平均基準を上回って頻繁に与えられる場合。この際、不快感として心理的に受けとめられた場合には精神的ストレスになる。)
- II : 社会的ストレス (家族関係, 対人関係などをはじめ、高度技術化が強いる心理的圧迫なども含む)
- III : 精神的ストレス (身体の内部環境の乱れ, 不調などによる不快感)

ストレス源からの刺激が、ストレス反応を生じる生理的機構の大筋は次の様に考えられる。物理的ストレスは、自律神経系を経て、視床下部に伝達される。また社会的ストレスや精神的ストレスは、不安や恐怖、怒り、不快、抑うつなどの情緒とし意識され、意識されたストレスは、大脳皮質を興奮させて皮質の緊張度を高める。皮質よりのインパルスは、前頭葉皮質から視床下部に伝えられる。

このようにして、物理的ストレスと同様に、社会的ストレス、精神的ストレスもまた、視床下部の興奮をひきおこし、これがストレス反応のひきがねとなる。

⑤ ストレスに対する反応の個体差

日常体験から、我々は、ストレスに対するストレス反応の生起について個体差がある事を推察している。しかし、その個体差の由来は、上記のようにストレスの幅が広いことから、一義的なものではあるまいと考えられる。

第一には、物理的な刺激に対する生得的な感受性の個人差が考えられる。次には、それを感じとった時にどの程度からストレス源と感じるかの水準の個人差が考えられる。そして、ストレス源と見なされるかどうかの基準が、生理学的な恒常機能の水準における個人

差に由来することになる。即ち、恒常機能の高さは、「ストレス耐性（ストレス源への寛容性）」を支える事となる。

恒常機能の高さは、これが視床下部—自律神経の機能的関連があるので、生得的に規定される範囲のあることが予測されるが、しかし、ストレスラーに対する耐性は、それが繰返して与えられることによって、学習を通して強化される可能性もまた、存在する。このように、「ストレス耐性」の個人差は、生得的に規定される部分を土台にしながら、そこに、個人の体験が積み重ねられた結果であることが推測される。

(2) 身体システムと心理システムへの影響

① 身体システムと心理システムの関連

これまで述べてきたように、生物体は、身体を“非自己”から守るための多くのシステムを持っている。それらは遺伝的素因、経験的素因によって複雑に規定され、更にその耐性（寛容性）は、発達や学習に伴って変容する。このようにし成立する。外部の刺激や物に対する“身体の構え”は、単に身体の構えに止まるであろうか。筆者は、これが“心の構え”に影響する事を仮定する。

例えば、強いアレルギー反応を持つ乳幼児・幼児に対しては周囲の成人達が、その環境に対して何かと気を配る事が多いであろう。やがて本人もまた下界に対して細かく気を配り、やたらなものを身に近づけまいとする習慣を獲得するに至るであろう。また、身体が下界に対して適正な防御反応を示す乳児・児童は、自己の身体をコントロールする事ができ、その事が、自己への信頼、他者への信頼、下界への安心感を成立させ、下界や他者に対して寛容な態度を形成させる土台を提供すると考えられる。

② 自己の存在を危うくするおそれのあるものや、自己の内的—貫性を損なうおそれのあるものに対する心の構えについての心理学的研究

人間の心理的世界が、何らかの意味で一貫した状態、均衡した状態を維持しようとする傾向を示すことは、これまで多くの理論・研究が明らかにしてきたところである。

近代の心理学的理論の中では、例えば Wertheimer (1945) らのゲシュタルト学派の考えの中にも、人間行動が動的な均衡に向かう事が指摘されている。また、心理的葛藤について分析を行った Lewin (1935) や、Miller (1944) の理論の背景にも、この様な発想を読みとることができる。

今世紀の後半、社会心理学の領域で、社会的態度の形成や変容の問題をめぐって、個人の内的—貫性保持傾向を理論的背景とする事が行われて来た。その代表的な理論をとしてハイダーのバランス理論 (Heider 1944, 1946, 1958) を挙げる事ができる。この理論では、主として、人が他者との関係で見出した認知的世界の非—貫性が、認知的世界に及ぼす影響についてとりあげている。認知的世界が“インバランス”になった時、これをバランス状態に回復しようとする緊張が生じると仮定している。彼の理論は、この領域では先駆的なものであるが、バランスの測定のレベルでは、態度の強さや、バランスの程度などについては特に配慮がない。

これに対して、態度の強度的な面の測定をSD法によって行い、これに基づいて態度変容を理論化したのに、オスグッドらの適合性理論がある。(Osgood and Tannenbaum 1955, Osgood, Suci, Tannenbaum 1957, Osgood 1960) この理論は、態度変容のみを理論化の対象にしている為に“不適合状態”において態度変容以外に生ずる反応については特に問題にしていない。

また、一貫性傾向から、態度変容を説明しようとした理論の一つに、Abelson と Rosenberg のバランス理論がある。この理論は、他の一貫性を問題とする理論と同じように、態度的な認知要素間のインバランスを減少し

ようとする傾向が人々の中に存在する事を前提とした理論化を行っている。しかし態度変容に向かって変化が生ずるには、インバランス状態に対する個人の“耐性の限界”を越えた時であるとの提案をしている。ここでは、内的一貫性を保持しようとする傾向の個人差に注目した視点が示されている。

このように個人差についての配慮は、Festinger の認知的不協和理論 (1957) の系列でもとりあげられている。

Festinger と Bramel は、不協和減少に向かう筋道が、精神分析理論における自我防衛機制と概念的に類似していると述べている。

(1962) Bramel は自我防衛機制の中で、投射の機制を不協和理論の実験的枠組で説明している。このように精神分析理論に不協和理論を適用しようとする試みは、精神分析的な思考に、予測の正確さをもちこむとともに、一貫性保持傾向の予測にも光を与えるところとなった。尚、この立場では、自己概念のもつ重要性が示唆されている。また、Davis & Davis (1960) は、認知不協和理論の立場から、他者を言語的に攻撃した者は、攻撃した相手に対して敵意(嫌悪)を抱く事を予測し、これを実験的に証明している。この場合には自尊感情 Self-esteem の高さが関係する事を示している。これらの結果からは、非一貫性の耐性の個人差には、自己概念や、自尊感情などの要因がかかわりをもつのではないかとの推論がなりたつ。

更に、Brehm (1962) は、不協和減少が、動機の認知的側面(例、空腹の程度の判断)の変化にも影響する事を実証している。そのうえ Brehm ら (1964) は、不協和の減少が血液中の FFA の濃度にも影響する事を見出している。これは、認知的不協和が、動機の認知的な側面だけでなく、認知的でない側面にまで影響するという知見である。

このように認知世界を中心とした内的一貫性保持傾向は、人格心理学的な諸概念と密接

な関連性があり、更には生理心理学的な側面と深く結びついている事がわかる。しかしながら、このような一貫性保持傾向が、どのような発達の経過をたどってゆくかについての資料を見出すことは現在のところ困難である。

2. 生体的な自己防衛システムとしての反応と、心理社会的な寛容性システムとの関連性についての実証的研究の試み

(1) これまでの研究成果と今回の研究目的
稲越は、これまで、対人認知や、社会的態度変容などの社会行動に対する個人差を生み出す要因の一つとして、認知的世界において、一貫性を保とうとする機能の個人差についての実証的研究を続けて来ている。(稲越 1967, 1967a, 1969b, 1983, 1984) この一連の研究の中では、先ず認知的一貫性の中には二つの系列が見られる事が示されている。その一つは、自己概念の中での斉合性傾向、対人認知空間におけるバランス傾向など、個人性の強い認知空間の中で一貫性を保とうとする傾向である。これとはやや次元の異なるものとして示されたのが、“社会的対象に対する認知-情緒次元間の一貫性傾向”である。社会的場面の中で、他者への寛容性として示されるのは、後者のような一貫性傾向と深くかかわりを持つと考えられる。具体的に言うならば、感情的には許容しがたい理論や、態度内容であっても、論理的な文脈の中で正しければそれは受け入れ事ができる様な現象である。

このような立場から、寛容性の形成という立場から発達の資料を集めて推論した結果として、“社会的対象に対する認知-情緒次元間の一貫性”を低めにしておける状態へと変化してゆくことが示唆された。この事は、“非一貫性への耐性”が発達的に形成される事を予想させる。

そこで今回の研究では、このような発達の過程に、前述の生理学的な「体の構え」が

関連するであろうとの仮説の下に、アレルギー反応の個人差、ストレスに対する反応の個人差を質問紙によってとらえ、このような生理的なレベルにおいて、外界からの刺激に対する反応への自己防衛の傾向と、心理・社会的な自己防衛としての一貫性保持傾向の個人差との関連性を実証的に検討しようとするものである。

(2) 研究方法

① “身体の構え” についての測定

前述したアレルギー反応やストレス反応などの“身体の構え”についての個人差を測定するために、39項目よりなる質問紙を作成し、5件法（「まったくない」から「しばしばある」まで）によって回答を求めた。質問紙の構成は、アレルギー反応に関して10問、ストレス反応に関して15問、アレルギー反応の起き易さと関係する徴候について9問、五感の鋭敏さに関する自己診断5問である。（表3）

② “心の構え” についての測定

認知的な一貫性の保持という“心の構え”については、Rosenbergらの理論に基づいて、これまで稲越（1983, 1984）が用いて来た。

「社会的態度内の認知—情緒的次元間の一貫性」傾向の測定を用いた。一貫性を保持しようとする傾向の個人差は、12個の態度対象に対する認知次元の測定値と、情緒次元の測定値との個人内相関係数（Con）を指標として示すこととした。（測定方法の詳細は稲越（1984）参照）

③ 被験者

都内C大学生 122名

(3) 結果と考察

① “身体の構え” の因子分析結果

「健康に関する調査」（“身体の構え”）について、「まったくない」～「しばしばある」の5段階に1～5の数値を与えた。39項目の平均値及び標準偏差は表3に示す通りである。

この数値に基づいて、39項目を主因子法による因子分析を行い、バリマック回転を行い、

主要な5因子までを抽出した。（表4）

第1因子は、「目まい・目の疲れ」「頭が重い」「動悸、胸苦しさ」などに負荷量が高い、ストレスに対する身体反応を中心とする項目である。これを「ストレス—身体反応因子」と名づける。

第2因子は、「ある種の魚を食べると、じんましんになる」「カニ・イカ・タコなどを食べると調子が悪くなったり、皮膚病になる」「薬によって副作用がおきる」などのアレルギー反応に関する項目である。負荷量35以上をとると「趣味やスポーツを楽しむ気分が起こらなくなる」の項目が含まれるが、これは反応の結果と関連するものと考えて、「アレルギー—性因子」と名づける。

第3因子は「困った時、素直に援助を求められる」「気分転換がうまくやれる」「何かうまくゆかない事があってもクヨクヨしない」「家族や友人に波やを相談できる」などの項目に負荷量が高い。これらの項目は、“難治化しやすい気管支ぜんそく患者の性格”とは逆の傾向、“心理社会的因子が加わっても身体疾患になりにくい人のよい面”（いずれも吾郷1989）としてとりあげられた心理的特性である。これを「ストレス耐性の因子」と名づける。

第4因子は、「ささいなことに腹が立ってイライラする」「気が散って、注意の集中ができにくくなる」「勉強や仕事に意欲がわかず根気がない」などに負荷量が高く、これらはいずれもストレス状態が持続したときに見られる心理的な症状である。これを「ストレス—心理反応因子」と名づける。

第5因子は、音・味などの感覚の鋭さの自覚に関する項目に負荷量が高く、「感覚的鋭敏性の因子」と名づけた。（表4）

② “心の構え”（認知—情緒—一貫性傾向）の測定結果

認知的側面と情緒的側面を一致させるようとする傾向を示す“斉合性係数”Con、を各

表3 健康に関する調査“身体的構え”の測定に用いた質問項目と、その項目別の平均値（5段階評定）N=122

変数名	平均値	標準偏差
X 1 気管支ぜんそくをおこす.	1.336	0.846
X 2 花粉症にかかる.	1.730	1.261
X 3 卵を食べると、気分が悪くなったりする.	1.295	0.807
X 4 牛乳が体に合わない.	1.434	0.887
X 5 大豆製品が体に合わない.	1.254	0.753
X 6 セロリやパセリが体に合わない.	1.443	0.906
X 7 薬によって副作用がおきる.	1.475	0.898
X 8 ある種の魚を食べると、じんましんになる.	1.287	0.741
X 9 カニ、タコ、イカなどを食べると調子が悪い.	1.287	0.741
X 10 虫が原因で皮膚に著しい疾患をおこす.	1.574	1.101
X 11 頭がスッキリしなかったり、重たい.	2.770	1.158
X 12 目が疲れたり、目まいがする.	2.623	1.196
X 13 動悸がしたり、胸苦しくなったりする.	1.967	1.123
X 14 食欲がわかず、食事がおいしくない.	2.221	1.090
X 15 吐き気がしたり、下痢、便秘をする.	2.311	1.095
X 16 肩がこったり、腰がだるい.	2.582	1.273
X 17 手足が冷たくなったり、汗が出やすい.	2.451	1.275
X 18 皮膚が荒れたり、かゆくなったり、かぶれる.	2.451	1.362
X 19 かぜをひく.	2.574	1.108
X 20 寝つきがわるく、熟睡感がない.	2.566	1.324
X 21 勉強や仕事に意欲がわかず、根気がない.	2.885	1.229
X 22 趣味・スポーツと楽しむ気にならない.	2.098	1.155
X 23 人に会うのが、おっくうになる.	2.541	1.160
X 24 気が散って注意が集中しにくくなる.	2.934	1.114
X 25 ささいなことで立腹し、イラつく.	2.787	1.209
X 26 自分の気持ちを素直に表現できる.	3.328	1.204
X 27 初対面の人とすぐうち解けられる.	3.172	1.316
X 28 困った時、素直に援助をうけられる.	2.934	1.226
X 29 気分転換がうまくやれる.	3.131	1.201
X 30 うまくゆかないことをクヨクヨしない.	2.852	1.226
X 31 家族や友人に悩みを相談できる.	2.902	1.277
X 32 自分の部屋でくつろげる.	3.844	1.312
X 33 ものごとを客観的にみられる.	3.402	1.178
X 34 自分の内なる声に素直になれる.	3.180	1.215
X 35 物の長さ・大きさが変わると気づく.	3.033	1.180
X 36 音程が少しでもはずれると気づく.	3.279	1.189
X 37 食べ物の味が変わると気づく.	3.525	1.216
X 38 異臭がすると、他人より先に気づく.	3.426	1.166
X 39 体に糸くず、小さな虫がつくとすぐ気づく	3.230	1.179

個人毎に算出した。傾向の強度による分布は、これまで大学生において測定した結果（稲越1984）とほぼ同一の傾向を示している。（表5、図1）

③ “身体の構え”と“心の構え”との関係の検討

“心の構え”を示す斉合性係数により、被験者の中から上位群（係数.50以上）18名、

表4 「健康に関する調査」の因子分析表：回転後の因子負荷量（直交回転）
バリマックス法—規準化—

変数名	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
X 1 気管支ぜんそくをおこす	0.0211	0.5547	0.1101	0.0237	0.0143
X 2 花粉症にかかる	0.1124	0.3869	-0.1516	0.0269	-0.0502
X 3 卵アレルギー	0.2093	0.6661	-0.0154	-0.1068	-0.0173
X 4 牛乳アレルギー	0.1804	0.3643	0.0277	0.1869	-0.0417
X 5 大豆アレルギー	0.0449	0.6004	0.1252	-0.0666	0.1985
X 6 セロリなどの野菜アレルギー	0.0344	0.3192	0.0191	0.0413	0.1223
X 7 薬へのアレルギー	0.0922	0.6624	0.1191	0.0812	0.0340
X 8 魚肉へアレルギー	0.0242	0.8461	-0.0645	-0.0210	-0.0812
X 9 カニ、タコ、イカなどのアレルギー	-0.0775	0.7249	0.0974	0.0007	0.1066
X 10 虫による皮膚疾患	0.3743	0.4286	-0.0178	0.1649	-0.1034
X 11 頭が重い	0.7768	-0.0329	-0.0581	0.2678	-0.1504
X 12 目まい、目の疲れ	0.8341	0.0370	-0.0585	0.1906	-0.0377
X 13 動悸、胸苦しさ	0.6168	0.1998	0.1541	0.0326	-0.0510
X 14 食欲がない	0.5364	0.1062	-0.0600	0.2913	-0.0419
X 15 吐き気、下痢、便秘	0.5526	0.2101	-0.1073	0.3221	-0.0528
X 16 肩こり	0.4942	0.0398	-0.1549	0.4041	-0.1462
X 17 手足の冷え、汗かき	0.4186	0.2065	-0.2652	0.2583	-0.1592
X 18 皮膚のあれ、かぶれ	0.4116	0.1840	0.0543	0.4105	-0.0993
X 19 かぜをひく	0.5044	0.0268	-0.2734	0.2759	-0.1218
X 20 寝つきが悪い	0.3683	-0.0094	-0.0199	0.4831	-0.0662
X 21 意欲、根気がない	0.2146	-0.0224	-0.1041	0.6054	-0.0674
X 22 趣味・スポーツを楽しめない	0.2134	0.3873	0.2193	0.4816	0.0440
X 23 人に会うのがおっくう	0.2295	0.1602	0.2483	0.5833	-0.0350
X 24 注意力散漫	0.2307	-0.0756	0.0204	0.7116	-0.1280
X 25 ささいなことに立腹	0.2535	-0.0028	-0.0231	0.7388	-0.1210
X 26 自分の気持ちを素直に表現できる	0.1538	-0.0208	-0.6145	-0.0305	-0.2336
X 27 はじめての人とすくうち解けられる	0.0881	-0.0843	-0.5704	-0.1409	-0.1633
X 28 困った時、素直に援助を求められる	0.1002	0.0627	-0.7680	0.0814	-0.1699
X 29 気分転換がうまくやれる	0.0483	-0.1206	-0.6774	0.0005	-0.1517
X 30 クヨクヨする	0.0019	0.0466	-0.6614	-0.0716	-0.1291
X 31 家族、友人に悩みを相談できる	0.0628	-0.1218	-0.6314	0.0568	-0.1352
X 32 自分の部屋でくつろげる	0.0359	-0.2681	-0.4651	0.1552	-0.3759
X 33 ものごとを客観的にみられる	0.0627	-0.0106	-0.3833	0.0865	-0.3424
X 34 自分の内の声に素直になれる	0.0816	0.1133	-0.4450	0.0357	-0.6099
X 35 品物の長さ大きさに気づく	0.0145	-0.0467	-0.2524	0.1677	-0.6387
X 36 音の変化に気づく	0.0686	-0.0678	-0.2752	0.1243	-0.5127
X 37 味の変化に気づく	0.0698	-0.1115	-0.2363	0.1056	-0.6961
X 38 異臭に気づく	0.2270	-0.0509	-0.1116	-0.0694	-0.6376
X 39 何かの接触に気づく	0.1320	-0.0214	-0.2051	0.1259	-0.6813
因子負荷量2乗和	3.8995	3.8687	3.8189	3.2285	2.9471
寄与率(%)	9.9987	9.9198	9.7920	8.2783	7.5568
累積寄与率(%)	9.9987	19.9185	29.7105	37.9888	45.5456

中位群（.10～.40）18名、下位群（.00以下）15名を選んだ。この上位群（H）、中位群（M）、下位群（L）の3群について、(ア)「健康に関する調査」の質問項目39項目についての平均値の有意差の検定（分散分析）及

び(イ)因子分析の結果から得られた5因子の因子得点の平均値比較を行った。

(ア)「健康に関する調査」39項目における、斉合性傾向H、M、L3群の平均値の比較。斉合性傾向H、M、L群の「健康に関する

表5 斉合性係数の分布とH.M.L群

	男	女	計	合計	
.901 ~	1		1	1	}
.851 ~ .900 .801 ~ .850	1		1	1	
.751 ~ .800 .701 ~ .750	1		1	1	} 上位 群 (H)
.651 ~ .700 .601 ~ .650	3		5	5	
.551 ~ .600 .501 ~ .550	2 6	1 1	3 7	10	} .50以上
.451 ~ .500 .401 ~ .450	3 5	2	5 5	10	
.351 ~ .400 .301 ~ .350	4 3	1	5 3	8	} 中 位 群(M)
.251 ~ .300 .201 ~ .250	3 1	2 1	5 1	7	
.151 ~ .200 .101 ~ .150	2 7		2 7	9	} .101~ .350
.051 ~ .100 .001 ~ .050	3 3	1	4 5	9	
-.050 ~ .000 .101 ~ -.050	2 1	2 1	3	3	} .000以下
-.150 ~ -.101 -.200 ~ -.150	2	1	3	3	
-.250 ~ -.201 -.300 ~ -.251	1 1		1 1	2	} 下 位 群 (L)
-.350 ~ -.301 -.400 ~ -.351	1	1	2	2	
-.450 ~ -.401 -.500 ~ -.451	2 1		2 1	3	
-.550 ~ -.501 -.600 ~ -.551	1		1	1	
-.650 ~ -.601	1		1	1	

調査」39項目の平均値を図2に示した。分散 (10%水準) で有意差のある項目を示してある。グラフ全体としては、一般にH群の平均分析の結果は左端に* (5%水準) (*)

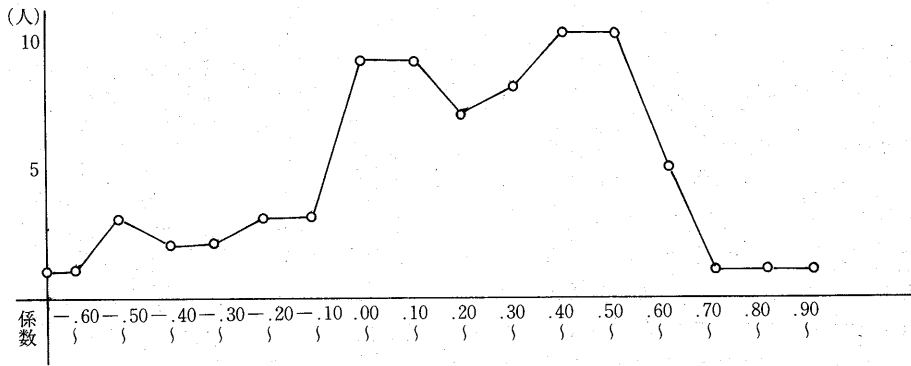


図1 “心の構え”の程度 (斉合性係数) の分布

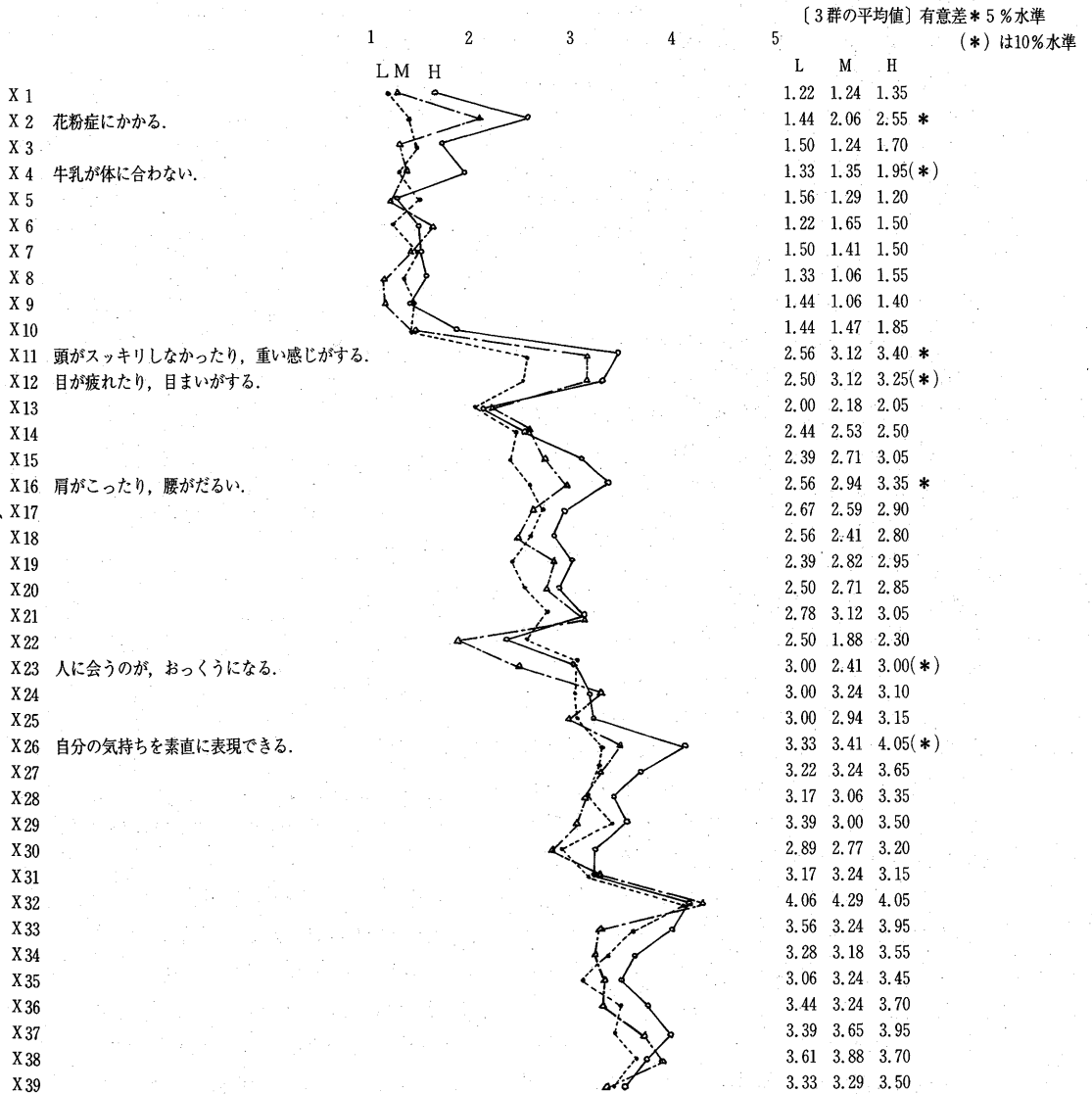


図2 「健康に関する調査」39項目の斉合性傾向 H.M.L群の平均値の比較

点が高く、物理的、心理的の刺激に対する感受性（被影響性）の強さを示唆するように思える。分散分析の結果、5%水準で有意差が見られた項目は、2.「花粉症にかかる」11.「頭がスッキリしなかったり、重かったりする」16.「肩がこったり腰がだるい」の3項目である。2は、アレルギー反応に関するもの、11、16はストレスに対する身体反応に関する項目である。10%水準で有意差が示された項目まで含めて考えると、今回の目的である「身体の構え」と「心の構え」についての関連性の存在については、部分的であるが、仮説を支持する実証が得られたと考えてよいであろう。尚、23「人に会うのがおっくうになる」24「気が散って、注意の集中ができにくくなる」などのストレス心理反応項目において、M群の得点が低い事も注目しておきたい。

(イ) “身体の構え” 5 因子の因子得点の “心の構え” の 3 群の平均値の比較

前項では、項目毎の傾向について、3群間の比較を行ったが、更にこの項目をまとめた因子分析の結果から、前述の5因子に対応する因子得点を、H群、M群、L群に選ばれた被験者毎にとり出して、その平均値をとり、比較を行った。(表6及び図3)

「ストレス-身体反応」については、H群が顕著に高かった。「アレルギー反応」については大きな差が見られなかった。「ストレス耐性」については、H群が大きく、M群が極度に低い傾向が示された。「ストレス心理反応」については、M群、H群、L群の順であった。「感覚的鋭敏性」ではL群が高得点であった。5因子を通してみると、H、M、L3群のかかわりは異なるが、ストレスに関連した3因子が、群間差をみせている事が、今後の検討の方向を示唆している。

④ 総合的考察

今回の研究は、“身体の構え”と“心の構え”の関連性についての探究的なものであり、

表6 斉合性傾向（心の構え）3群の身体の構え5因子の因子得点の平均値

NO	因子名	H	M	L
1	ストレス-身体反応	.6098	.2422	.0628
2	アレルギー反応	.1355	-.0902	.1283
3	ストレス耐性	.2268	-.2830	.0920
4	ストレス-心理反応	.0808	.2242	.1828
5	感覚的鋭敏性	-.0309	-.1685	-.1890

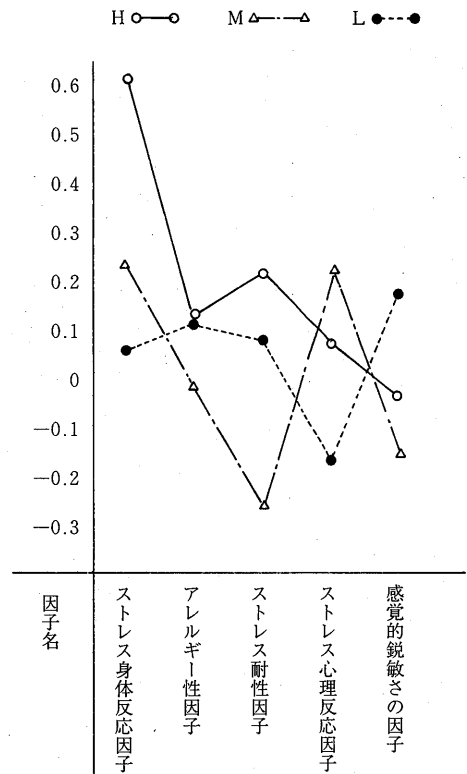


図3 “心の構え”による3群の“身体の構え”5因子の因子得点別の平均値

その限りにおいて緒光が見えたといえる。しかし、今後の研究の為には、次の緒点が明らかにされる必要がある。

その第1は、アレルギー反応についての説問の吟味である。今回は大学生に、アレルギー反応について、現在の状況を問うているが、表1に見る様に、アレルギー反応の出現

頻度が発達的に変化するという事実を踏まえると、“身体の構え”を発達的に追跡する事が、今後の研究の可能性を広げてゆくと考えられる。

第2に、“心の構え”としての一貫性傾向の程度として、「社会的対象」についての“認知—情緒の一貫性係数”を指標としたが、稲越(1983)に示されたように、自己概念に関連した一貫性傾向と、社会的態度に関連した一貫性傾向が異なった次元として存在するとすれば、この事を視野に入れる事によって、(2)―②で述べた自我防衛機制や、自尊感情などとの係わりも明らかにしうるのではないかと考えられる。

今回の研究では一貫性傾向のH, M, L群の特徴に説明しきれない部分が残されている。一貫性傾向の高い(寛容性の低い)H群は、ストレス身体反応は、高得点を示しながら、ストレス心理反応は高くはない。しかし、ストレス耐性因子については高い因子得点を示す事をどう理解するか。この点の解釈は、内的非一貫性というストレス—をどのように位置づけるかという問題と関連してくる。ストレスの源泉の部分で述べたところを根拠にすれば、II, 社会的ストレス—として規定されている部分が、対人関係、自己に関した非一貫性に係わり、今回の非一貫性指数はIII, 精神的ストレス—として規定された部分と関わるとも考えられる。このような仮定を置くと、ストレス耐性自体が、ストレスの種類によって異なる可能性も考えられる。ストレス耐性についてのよりこまかい検討が第3の課題として残された。

参考引用文献

- 1) Abelson, R. R., & Rosenberg, M. J. Symbolic psycho-logic: A model of attitudinal cognition. *Behav. Sci.* 1958, 3, 1-13.
- 2) 吾郷晋浩: アレルギーの心理的側面, からの科学, 147, 1989 pp 87-91.
- 3) Bramel, D, A dissonance theory approach to defensive projection *J. abnorm. soc. psychol.* 1962, 64, pp 121-129.
- 4) Brehm, J. W. Motivational effects of cognitive dissonance (In M. R. Jones Ed) *Nebraska symposium on motivation*, Lincoln University of Nebraska Press, 1962. pp 51-77.
- 5) Brehm, M. L., Back, K. W. & Bogdonoff, M. D. A physiological effect of cognitive dissonance under stress and deprivation, *J. abnorm. soc psychol.*, 1964, 69, pp 303-310.
- 6) Davis, K., & Jones, E. E. Changes in interpersonal perception as a means of reducing cognitive dissonance *J. abnorm. soc. psychol.* 1960, 61 pp 402-410.
- 7) フェスティンガー, L 末永俊夫訳: 認知的不協和理論 誠信書房.
- 8) Festinger, L., & Bramel, D. The reaction of humans to cognitive dissonance (In Brachrach, A (Ed) *The experimental foundation of clinical psychology*. New York Basic Books) 1962, pp 254-279.
- 9) Heider, F. Social perception and phenomenal causality *psychol. Rev.* 1944, 51, pp 358-374.
- 10) Heider, F. Attitudes and cognitive organization *J. Psychol.* 1946, 21, pp 107-112.
- 11) Heider, F. *The psychology of inter personal relations* New York Wiley, 1958.
- 12) 堀内淑彦ほか: 免疫とアレルギー 新免疫学叢書7 1981 医学書院
- 13) 稲越孝雄: 交友関係・対人認知における個人差の研究——認知・情緒次元の不一致に関する不寛容度との関係, 日本教育心理学会第11回大会論文集, 1969.
- 14) 稲越孝雄: 認知—情緒次元での“不一致に関する不寛容度”の研究, 日本心理学会第 回発表論文集.
- 15) 稲越孝雄: 不寛容性の個人差の研究(1), 文教大学教育学部紀要第17集, 1983.
- 16) 稲越孝雄: 不寛容性の個人差の研究(2), 文教大学教育学部紀要第18集, 1984.
- 17) 加藤正明・森岡清美編: ストレス入門, 有斐閣, 1975.
- 18) 狩野恭位置: 免疫学入門, 東京大学出版会, 1987.
- 19) Lewin, K. *A dynamic theory of personality* New York McGraw-Hill. 1935.

- 20) Milles, N. E. Experimental studies of conflict (In Mcv, Hunt (Ed) Personality and the behavior disorders Vol I New York ; Rnald 1944, pp 431-465.
- 21) Osgood, C. E., & Tannenbaum, P. H. The principle of congruity in the prediction of attitude change psychol, Rev, 1955, 62, pp 42-55.
- 22) Osgood, C, E., Suci, G. J., & Tannenbaum D. H. The measurement of meaning. Urbana Univer. of Illinois Press, 1957.
- 23) Osgood, C. E. Cognitive dynamics in the conduct of human affairs Pub, Opin, Quart. 1960, 24, pp 341-365.
- 24) Rosenberg, M. J. Cognitive reorganization in response to the hypnoti reversal of attitudinal affect J. Per. 1969, 28, pp 29-63.
- 25) 館野幸司・岸菊子：子供の食物性アレルギー，1981，女子栄養大学出版部。
- 26) Wertheimer, M. Productive thinking New York Harper. 1945.